［研究ノート］

西和辞典の周辺

中川　清*／児玉　悦子**

Spanish Dictionaries in Japan

Kiyoshi NAKAGAWA and Etsuko KODAMA

This article analyzes the history of Spanish dictionaries (Spanish-Japanese dictionary, Japanese-Spanish dictionary, technical terminology, etc.) from the Meiji era to the present time in Japan. Through this analysis the authors intend to evaluate the situation of Spanish in Japan's foreign language education.

はじめに

我が国におけるスペイン語辞典（西和辞典及び関連の辞典）刊行の状況並びにその周辺を探ることによって、明治期以降の外国語教育におけるスペ

＊なかがわ・きよし：敬愛大学国際学部非常勤講師　ラテンアメリカ地域研究／スペイン語学
Part-time Lecturer, Faculty of International Studies, Keiai University, area study of Latin America and Spanish language.
＊＊こだま・えつこ：桜美林大学助教授　スペイン語学
Assistant Professor, Obirin University; Spanish language.

イン語の位置について考えるのが、この稿の目的である。下記の順序を追って考察することにしたい。

1．マニラ版『日西辞書』
2．大正期におけるスペイン語辞典の刊行
3．大正期におけるポルトガル語辞典の刊行
4．村岡玄『和西辞典』
5．戦前昭和期におけるスペイン語辞典及び学習書
6．高橋正武『西和辞典』
7．1980年代以降の西和辞典
8．和西辞典
9．西和小辞典及び専門用語辞典
10．ポルトガル語辞典

1．マニラ版『日西辞書』

長崎版『日葡辞書』のポルトガル語原題は、“Vocabulario da lingoa de Iapam com a declaração en portugues”（「ポルトガル語の説明を付したる日本語辞書」）である。日本におけるキリスト教伝道に役立てるべく、1603年に長崎においてイエズス会の神父たちによって刊行されたこの辞書は、現在岩波書店から日本語訳が出版されている。本編２万5,967語、補遺6,831語を収めたこの辞書は、16世紀終わり頃の口語日本語の語彙を知るうえで貴重な資料となっている。

さらに、この『日葡辞書』には、スペイン語訳とフランス語訳があり、それぞれ『日西辞書』及び『日仏辞書』と略称されている。『日西辞書』（“Vocaburario de la lengua japonesa y españ ola”）は、ドミニコ会派の修道士ハシント・エスキベール Jacinto Esquivel がスペイン語に訳し、1630年にマニラにおいて刊行したものであるが、これが我が国最初の和西辞典である。

この『日西辞書』の原題は、“Vocabulario de Japón declarado primero en portugués, por los PP. de la Compañía de Jesús de aquél Reyno, y agora

en castellano, en el Colegio de Santo Thomás, en Manila, 1630”（「先ずポルトガル王国イエズス会神父によってポルトガル語の説明がつけられ、いま1630年マニラのサント・トマス学校においてカスチリア語の説明がつけられた日本語辞書」）となっている。『日葡辞書』には新たに多数の語彙が増補されているが、『日西辞書』にもそのまま収録されているため、合計617ページとなっている。

次に江戸時代の鎖国期にあってスペイン語に接触し、この言語の学習を試みたのは、メキシコに漂流した水夫たちであろう。天保13年（1842年）２月、スペイン船に救助された栄寿丸の船頭善助ら９名は、現在のメキシコに上陸している。

翌年（1843年）12月長崎に帰着した善助ら一行の聞き書きに基づいて「東航紀聞」10巻及び「海外異聞」が編纂されている。そして、これら見聞記には、日本人水夫たちが９ヵ月という短期間において反復的な聞き取りによって習得した、日常生活に必要な618に及ぶ語彙と会話表現が収録されている。天文、地理、身体、服飾、月日の称呼など15項目に分類した日本語に対応するスペイン語が記載された単語集となっている。

上記の「単語集」には、当然ながらカタカナによる発音表記の誤り、あるいは間違った理解が散見される。しかしながら、鎖国期の日本人が接することになったスペイン語の理解度を知るうえで興味ある資料である。なお、詳細については、児玉悦子「江戸末期漂流民のスペイン語学習」（桜美林大学『国際学レビュー』第８号、1996年）がある。

２．大正期におけるスペイン語辞典の刊行

国立国会図書館その他の蔵書によれば、明治31年出版のC・イニーゴ『スパニッシュ會話』以降明治41年刊の金澤一郎『日西会話』に至るまで、計６冊のスペイン語会話書が発行されている。また、岡崎屋書店編『西班牙語独修』（明治40年）及び金澤一郎『西班牙語動詞字彙』（同41年）の２冊の学習書が出版されているが、この辺の詳細については、児玉悦子「西和

辞典の過去と現在」（国士舘大学『教養論集』第47号、1999年３月）がある。

西和辞典あるいは和西辞典が編纂され出版されるようになったのは、大正期に入ってからである。まず、酒井祥州（市郎）『新譯西和辞典』が、大正５年に海外社から出版されている。袖珍判297ページの小型本で約6,500語が収録されているが、むしろ単語集と言うべきであろう。次に、東京外国語学校教授金澤一郎の『和西新辞典』（丸善　大正８年）が出版されているが、コンサイス・サイズで872ページである。さらに金澤は、大正12年に『西日辞典』を出版している。

大正14年には、前出の『新譯西和辞典』が、今度は岡崎屋書店から刊行されている。酒井は大正２年に東京外国語学校スペイン語科を卒業している。日本海外殖民学校でスペイン語を教えたのち、拓殖大学でも教鞭をとっている。その間、『日西自由会話』、『独修西班牙語会話』、『速修西班牙語文法』を刊行した酒井は、大正15年には同じく岡崎屋書店から『最新西班牙語文法』を出版している。

のちに『西和辞典』を完成する村岡玄は、大正14年に『いろは音引和西会話辞典』を出している。東京西班牙語学会刊となっているが、実際は私家版である。そして同じ年に、日墨協働会社編『西日辞典』が右文社出版部から刊行されている。この辞典の完成に至る経緯は、日墨協会編『日墨交流史』によると、以下のような概略である。

明治30年（1897年）、チァパス州に入植したいわゆる榎本殖民団は、邦人移住者35名の努力の甲斐なく崩壊してしまった。そのなかで、岩手県出身の照井亮次郎ら３名を中心に「三奥組合」が結成された。そして明治38年（1905年）には、日墨協働会社の設立へと発展している。

現地の生活を通じて西和辞典の必要性を痛感していた照井は、大正３年（1914年）同郷の村井二郎をチァパスに招請した。村井は同志社大学に在籍していたが、スペイン語の素養がなかったため、現地においてスペイン語を基礎から学習するとともに、西和辞典の編纂にのみ専念していた。

この辞典の校正者として医学博士田丸卓朗、金澤一郎、医学博士熊谷安正が名を連ねている。田丸はローマ字論者として知られており、金澤は前

述のように東京外国語学校スペイン語科教授である。この『西日辞典』の収録語数は約3万語であるが、スペイン語に対応する日本語にローマ字が並記されているのは、日本人二世、三世あるいはスペイン語を母国語とする人々への配慮のためである。しかし、2万部が出版されたこの辞書が完成したときには、日墨協働会社は既に消滅していた。

そして、9×17cm、全1133ページの『西和辞典』の緒言に「大正十四年八月在墨国」の照井亮次郎は次のように記している。

榎本殖民団及びその後日墨協同会社の開拓事業に参加した日本人移民は、スペイン語を解せぬため現地人の「理由ナキ嘲笑ニスラ酬ユル能ハズシテ辱恥ノ恨ミヲ尽シ悲憤ノ涙ニ送リシ日幾許ゾ、之レ実ニ忍バザル一種ノ悲劇ナリシナリ（後略）」。こうした苦境にあって、「西和辞典ノ出版ヲ渇望セリ然カモ日本ノ学者ニ対スル吾人ノ期待ハ裏切ラレテ其恵ニ浴スル能ハザルコト二十有六年ナリ」。

日本から呼び寄せた村井二郎が、「本書稿ヲ起シテヨリ茲ニ四年千九百十七年ニ至リテ漸ク脱稿」したものの、折柄メキシコ革命及び、これに伴う混乱のなかで、「（日墨協同）会社自身モ亦甚大ナル打撃ヲ蒙リ本書ノ出版ヲスラ困難ナラシムニ至レリ」。しかしながら、財団法人啓明会によって「出版ヲ補助セラルルニ至リ着手後十年ニシテ始メテ世ニ出ヅルノ機運ニ際会セリ」。さらに大正13年の関東大震災の報に接して、既に原稿を渡してある印刷会社も消失したかと危惧したが、幸運にも無事であったことを喜んでいる。

「日本ノ学者」が手をつけないため、数々の辛苦のなかで彼等自身が完成させた『西和辞典』が不十分な内容であるのも止むを得ないだろう。同書の奥付には「編集者照井亮次郎」とあり、定価は4円50銭である。

ところで、前出の『日墨交流史』には、日墨協働会社とあるが、この『西和辞典』では、日墨協同会社となっている。ここでは、それぞれの表記を併用した。

3．大正期におけるポルトガル語辞典の刊行

大正7年には、東京外国語学校にポルトガル語科が新設された。その頃、専攻語学あるいは第二外国語としてポルトガル語を教えていた高等教育機関はほかになかった。一方、明治41年に金澤一郎『ほるとがる（ぶらじる）語会話』151ページが大日本図書株式会社から発行されているが、金澤は大正７年に東京外国語学校スペイン語科教授に就任している。

同７年８月、大武和三郎『葡和辞典』が刊行されている。同書に記された著者の肩書は「伯剌西爾公使館員」となっており、「伯語研究会編」と記されているが、大武の自費出版である。さらに大武は、大正14年に『和葡辞典』を出版している。

スペイン語学習書に比べて、ポルトガル語学習書の出版はさらに低調である。星誠『ポルトガル語四週間』が、大学書林の外国語独習書シリーズの一冊として昭和初期に発行されているが、それ以外にはブラジル移民を対象とした簡単なポルトガル語会話書が発行されているに過ぎない。

一方、大正期に出版された前述の『葡和辞典』及び『和葡辞典』に続いて、大武和三郎は独力で昭和12年に５万語収録の『葡和新辞典』を発行している。筆者が手にしているのは昭和51年発行で、やや横長のコンサイス判1126ページである。発行者は大武信一となっているが、大武和三郎の私財を投じて完成されたこの『葡和新辞典』の刊行を引き受ける出版社がなかったのだろう。

明治23年ブラジル王国海軍練習艦アルミランテ・バローン号が訪日し、大武和三郎は同艦に乗船してブラジルに渡った。現地に7年間滞在した後、明治33年にブラジル公使館が東京に開設されるとともに通訳として任用され、以後38年間にわたって同国公使館（のちに大使館）に勤務している。葡和大辞典の刊行を計画したのは昭和２年であるが、実際に前述の『葡和新辞典』が完成したのはそれから10年後であり、大武は既に66歳を迎えていた。

4．村岡玄『西和辞典』

昭和２年（1927年）に発行された村岡玄『西和辞典』は、それ以前に刊行されていた類書に比べると質量ともに秀れていた。

明治43年（1910年）に東京外国語学校スペイン語科を卒業した村岡玄は、直ちに母校の講師に任用されている。２年間の勤務を中断したのち、ふたたび大正３年から３年間を母校の教壇に立っている。その職を辞した理由は不明であるが、その後は西和辞典及びスペイン語学習書の執筆に専念した。大正14年（1925年）には、『いろは音引和西会話辞典』を東京西班牙語学会（のちに東京スペイン語学会）から出版している。

ところで、高橋正武「自明治二十年至昭和二十年西班牙語学」（『東京外語スペイン語部八十年史』昭和54年）によれば、東京外国語学校に入学したばかりの高橋は、この『西和辞典』の編者である村岡の「私宅まで買い」求めにいっている。そして発行所である「東京西班牙語学会というのは、商号ないし屋号のようなものだったらしい」と記しているように、実際には、村岡の自費出版である。

東京外国語学校校長、台北帝国大学教授などを歴任し、戦後は上智大学総長にも就任した文学博士村上直次郎が同書に寄せた序には、昭和２年６月６日と記されている。それほどの需要も見込まれないまま、自費出版として世に出た17×12cm、820ページの『西和辞典』は出版時の特価５円50銭、定価６円50銭と割高である。ちなみに、昭和12年に白水社から出版された『新仏和中辞典』はほぼ同サイズの815ページであるが、定価は３円80銭である。

その後、81ページにわたって第一回の増補が行われ、さらに、昭和2年（1937年）には98ページにわたる「一万余語を輯めた西和辞典第二増補」が完成しているが、刊行されていない。そして、終戦を迎え、昭和24年には、村岡『西和辞典』は新たに白水社から発行されているが、Ｂ６変型1030ページ、定価680円である。

昭和27年（1952年）には、増補第３刷が発行されているが、定価850円である。白水社が発行所となり、戦後日本の国情が安定してゆくとともに、この『西和辞典』の販売部数も増えていった。

なお、第二増補の「はしがき」には、「この増補と同数あるいは以上の学術語を主とした第三増補を刊行する」と記されているが、昭和30年に至って増補五版が出版され、総ページ数は1120ページに達している。前出の『東京外語スペイン語部八十年史別巻』で、高橋正武は、村岡玄『西和辞典』について次のように記している。

「いやしくもイスパニア語の文献に現れる単語は、目にふれた言葉は一切あますことなく、ことごとく、これを収録するというのが、著者（村岡玄――引用者）の基本的な態度である。だから、その収録語数では『既刊の類書』ばかりでなく、現在でもなお、これをしのぐ類書は出ていない」。

一方、『東京外語スペイン語部八十年史』に寄せられた同校卒業生の回想によれば、村岡玄は「自尊心が強過ぎたと申しますか、世間を知らな過ぎたと申しますか」とある。村岡が、東京外国語学校を去ることになった背景には、こうした彼の性格が影響していたのかもしれない。

ともあれ、村岡玄という人物は、どこか斜めに構えたところがあったようである。戦後、自ら「上毛の寒村」と称している群馬県に往んでいた村岡玄は、「農夫也」（nobuya）の筆名で、昭和28年（1953年）に『非実用生きたスペイン語会話（壱）』を刊行している。東京スペイン語学会発行とする僅か104ページの小さなこの本は、晩年に近い村岡玄の自費出版である。

同書の「まえがき」には、「ド偉い先生が我が魂を打ち込んで書かれた会話本中いろいろ迷訳がある」とあり、さらに「出鱈目文句や役にも立たない例だけの対訳会話本が多数販売されている」。村岡玄の性格を「自尊心が強過ぎたと申しますか」と記した人物評を先に紹介したが、母校東京外国語学校（戦後は東京外国語大学）スペイン語科の教授達に対抗しようとする著者の姿勢が、この小さな本からうかがわれる。

そして、巻末の「近刊予告」には「〈和西辞典〉既に完成した原稿を永

年死蔵して来たが、多年刊行を見なかったのは、自分の病気と金のない為であった。今回一大修正を加えて、日本語辞典の完全なるスペイン語版として刊行する」とある。しかしながら、この和西辞典が出版されることはなかった。

5．戦前昭和期におけるスペイン語辞典及び学習書

前項で触れた村岡玄は、昭和４年に『西和熟語慣用句辞典』（東京西班牙語学会、昭和４年に白水社より発行）を、昭和17年には村岡恭子との共編で『中南米地名辞典』を出版している。さらに、昭和15年に『新エスパニア語文典』（大観堂）を刊行しているが、ほかに『西班牙語会話文法（全）』、『西班牙語読本（会話独習用）』、『独習西班牙語全解　第一、第二』などが、村岡玄によって刊行されている。

戦前最も多く版を重ねたスペイン語学習書は、東京外国語学校教授笠井鎮夫『西班牙語四週間』（のちに『スペイン語四週間』）である。大学書林発行の「四週間シリーズ」の一冊として、昭和８年に初版が発行されている。また同じ昭和８年には、金澤一郎『初等西班牙語研究』（崇文堂）も刊行されている。

一方、大正10年（1921年）に『模範仏和大辞典』を刊行した白水社は、フランス語関係書の出版を増やしているが、昭和初期にはフランス語学書の出版社として知られるようになっていた。その白水社が最初にスペイン語学習書を出版したのが、昭和９年の大阪外国語学校教授佐藤久平『スペイン語第一歩』である。昭和13年には同じく佐藤久平『標準スペイン会話』が白水社から出版されている。

さらに白水社からは昭和10年に、東京外国語学校助教授高橋正武『西班牙語文法読本』が出版された。同校教授永田寛定が同書に寄せた序文には、「日本で編纂された西班牙語読本として、教室用のものが公刊発売される嚆矢と言へよう」とあるが、高橋自身は「千部刷って品切れまでに七年かかった」と『東京外語スペイン語部八十年史』に記している。平均して、

年間143部が売れた計算になるが、当時のスペイン語学習人口がいかに少なかったかを示している。

戦後の白水社はスペイン語辞書、教科書あるいは文法書などを数多く出版しているが、昭和9年に刊行された『スペイン語第一歩』が、同社にとってスペイン語関係出版の「第一歩」となった。また、語学専門出版社として知られるようになっていた大学書林も、前出の『スペイン語四週間』以降下記のようにスペイン語教科書の出版を手がけている。

昭和10年代には、下記のスペイン語関係書が出版されている。

昭和12年　ファン・カルボ『日西大辞典』三省堂
昭和14年　武中　耒『新聞西班牙語の読み方』タイムス出版社
昭和16年　太田兼四郎『西班牙語辞典』岡崎屋書店
昭和17年　遠藤　遠『入門西班牙語』三笠書房
　　岡田　峻『明日へのエスパニア語』三省堂
　　笠井　鎮夫『標準西班牙語読本』大学書林
　　国沢　慶一『第一西班牙語読本』大学書林
昭和19年　国沢　慶一『第二スペイン語読本』大学書林
　　大矢全節編『西日医学大辞典』日本出版社

以上のほか昭和16年から翌年にかけて、マダリアーガ『西班牙の性格』、アソリン『西班牙を想ひて』、オルテーガ『美術雑筆』など、注釈つきテキスト 8 点が大学書林から発行されている。いずれも、旧制専門学校教科書用の薄い小冊子である。

当時におけるスペイン語学習の主目的の一つは、昭和期に入って漸増してきた中南米貿易への対応である。昭和 6 年に大島政志『西班牙商業文研究』（春陽堂）、同13年には笠井鎮夫『新選西班牙語商業通信』（外語学院）、同17年に金澤一郎・宮崎浩『西班牙語商業文提要』（三省堂）が出版されている。

東京高商、神戸高商及び横浜高商に加えて、昭和期に入って高松高商、高岡高商、小樽高商など官立高等商業学校でもスペイン語が教えられている。また当時の宇都宮高等農林学校（現在の宇都宮大学）、あるいは私立の

横浜専門学校（現在の神奈川大学）でもスペイン語が教えられていたが、いずれも中南米諸国への移民あるいは貿易を念頭においたスペイン語の学習であった。

6．高橋正武『西和辞典』

昭和24年に村岡玄『西和辞典』の出版元となった白水社は、その後二度にわたって改訂増補版を出している。しかしながら、大正5年頃から編纂作業がすすめられたと思われるこの『西和辞典』は、もはや古びた存在となっていた。そして、昭和33年（1958年）になって、白水社は高橋正武『西和辞典』を出版している。

見出し語数約6万8,370の高橋正武『西和辞典』の「まえがき」には、「この書物の切っかけを作ってくださったのは、永田（寛定）先生だった。先生に連れられて、白水社へ行」ったのは、「昭和10年の春のはずだ」と記されている。初版発行は、1958年4月15日となっているから、編纂に着手してから発行まで少なくとも23年が経過している。

戦時下も編纂作業が続けられたと思われるが、前出の「まえがき」には、「終戦直後、米軍飛行機からの投下物が原稿を吹っ飛ばした」と記されている。幸いにも、散乱した原稿を見知らぬ人が届けてくれたが、「もし飛び散ったままだったら……などと思う」とある。

それからさらに20年後の昭和53年（1978年）に「増補版」が刊行されている。手元にある高橋正武『西和辞典』の奥付には、1958年4月15日初版発行、1969年1月10日第10版（実際は第10刷）発行とあり、本文982ページである。それから10年後に出版された高橋正武『西和辞典　増補版』も、本文は前記の第10版（第10刷）と同じく982ページである。ざっと見たところ増補された形跡はない。

ともあれ、村岡玄『西和辞典』に比べると、高橋正武『西和辞典』の出版部数は遥かに多い。

村岡玄及び高橋正武の『西和辞典』は、いずれも長年にわたる個人的な

作業によって作られている。こうした職人的とも言える個人作業はいわば前近代的な作業方法であるが、それぞれの西和辞典が編纂された時代にあってはほかに方法がなかっただろう。村岡玄『西和辞典』は昭和前半期において、高橋正武『西和辞典』は昭和後半期において、それぞれ30年間にわたって実質的に我が国唯一の西和辞典であった。それぞれの時代において、質量ともにさらに水準の高い西和辞典の出現を必要とするほどには、我が国のスペイン語学習者の層は厚くなかったと言えるだろう。

7．1980年代以降の西和辞典

1986年９月、ビセンテ・ゴンサーレス、一色忠良共編『西和辞典』がエンデルレ書店から刊行された。縦横19×25.5cm、1547ページの大型判であり、見たところ研究社『新英和大辞典』に匹敵するサイズである。99年末現在に至るまで我が国で出版された最大のサイズであるが、収録語数の記載はない。後述するように90年代になって出版された西和辞典３点のいずれよりも見出し語数は少ない。

エンデルレ書店『西和辞典』では、スペイン語圏の日本語学習者のため、日本語がローマ字表記されている。スペイン語で書かれた同書の序文には「日本人との接触に役立つ簡単で迅速にひける辞典の必要性」が訴えられている。そして、この西和辞典が「スペイン語圏の学習者に対して日本語学習への熱意と関心を刺激する」ことを期待している。

この『西和辞典』の編者名が、p. Vicente Gonzales o. p. と記されているように、ビセンテ・ゴンサーレス師は聖ドミニコ会神父である。17世紀にイエズス会神父によって編纂された『日葡辞書』あるいは『日西辞書』が我が国におけるキリスト教布教活動を容易にすることを目的としていたように、このエンデルレ書店『西和辞典』も来日したカソリック神父たちに役立つことを念頭においたと思われる。

ビセンテ・ゴンサーレス師は、1954年にスペイン語で書かれた『日本語文典』（三省堂）を出版している。昭和13年（1938年）に『日西大辞典』を

出版したファン・カルボ師もまた、長期間にわたって四国の松山に在任していた神父である。

この『西和辞典』の共編者である一色忠良は、小樽商科大学、松山商科大学（現在の松山大学）などでスペイン語を講じておられた。同氏の「私的回想による〈語学校〉への後先」（『HISPANOFILOS』1992年2月号）によれば、前記のファン・カルボ神父は松山在任時に「西和辞典」の原稿を執筆しており、その原稿は「12冊の大学ノートにぎっしり書き込まれた手書きの原稿のまま教会に保存されていた」とある。カルボ師の「西和辞典」はついに出版されることはなかったが、このカソリック神父の遺志はゴンサーレス師に引き継がれたと言えるだろう。

ところで、高橋正武『西和辞典』の初版が刊行されてから32年が経過した1990年に、桑名一博ほか編『西和中辞典』（小学館）が刊行されている。前出の村岡『西和辞典』及び高橋『西和辞典』は、ともに、いわゆる「コンサイス版」に近いサイズである。語数約6万7,000語、用例6万4,000を収めたこの『西和中辞典』の刊行によって、質量ともに「中辞典」が出版されたことになる。

前出の村岡『西和辞典』及び高橋『西和辞典』には、全く図版が収められておらず、辞書としては不完全である。一方、小学館『西和中辞典』には、図版1,000点が収められており、極めて説明的な内容となっている。

さらにまた、この『西和中辞典』に相前後して、下記の西和辞典が出版されているが、いずれも多数の図版が収められている。

宮城昇・山田善郎〈監修〉『現代スペイン語辞典』白水社、1990年、収録語数3万5,000語

カルロス ルビオ・上田博人編『新スペイン語辞典』研究社、1992年

白水社『現代スペイン語辞典』は、1999年1月に出版された「改訂版」について触れることにして、先に研究社『新スペイン語辞典』を紹介する。

この『新スペイン語辞典』は見出し語約3万7,000語、副見出し語及び成句見出し語を加えると計5万3,000語とある。同書の序文には「本辞典

は若い執筆者たち」によって作られたとある。その編纂・執筆者に東京大学関係者が多い点は、『西和中辞典』及び『現代スペイン語辞典』の編纂・執筆者の多くが東京外国語大学あるいは大阪外国語大学の関係者によって占められているのとは対照的である。

そして、1999年1月に刊行された白水社『現代スペイン語辞典　改訂版』は、旧版に比べて250ページ増えており、新たに見出し語1万語を加えて計4万6,500語を収録している。科学・技術分野を含めた時事用語を多数加えるとともに、新しいアルファベットによる見出し配列を採用したのが、この改訂版の特色となっている。

従来、スペイン語のアルファベットでは、ch、ll、ñ は独立した字母となっている。このためスペイン語辞典ではこれら3つの字母はいずれも単独の見出し語となっている。

しかしながら、1994年に開催されたスペイン語圏22ヵ国言語アカデミー会議において、ch 及び ll を独立した字母としないことが認定された。そのため、他の現代ヨーロッパ語と同様に辞典の見出しでは、ch は c に、ll は l の項に含めて配列されることになった。ñ だけは存続しているが、コンピューター対応など、EU（欧州連合）内におけるこの特殊な文字の存在は微妙である。

同じく白水社から1997年に刊行された宮本博司編『パスポート初級スペイン語辞典』と、この『現代スペイン語辞典　改訂版』、そして、2000年になって出版された小学館『プログレッシブスペイン語辞典　第二版』を除いて、2000年11月現在、我が国で発行されている西和辞典は、いずれも旧来のアルファベット配列に従っている。このため、初めて西和辞典に接する学習者には、混乱をもたらすことになる。

「西和」（スペイン語―日本語）に関して、まだ「大辞典」が出現しておらず、前述の4つの辞典が中級以上の学習者及び実務関係者を対象とした西和辞典となっている。その中にあって、『現代スペイン語辞典　改訂版』は、その序文に「現代の様々なジャンルの用語を収集した」と記しているように、科学・技術分野を含めて最新の時事用語を取り入れているのは、

この時点での最も「新しい」辞典であることの特権である。

次に、この項でとりあげた4つの西和辞典について、いくつかの語彙に対する説明を比較してみよう。(1)はエンデルレ書店『西和辞典』、(2)は小学館『西和中辞典』、(3)は研究社『新スペイン語辞典』、そして(4)は白水社『現代スペイン語辞典　改訂版』である。

coyuntura ; *coyuntural*

(1) : 1. 関節、2. 時期、機会、時節。coyuntural の見出し及び説明はない。

(2) : 上記の1、2の説明に加えて、3として「状況、情勢」の訳語が見られる。

また、～crítica「危機、重大な局面」と説明されている。

coyuntural ;「状況、状況に応じた」、una medida coyuntural「応急処置」とある。

(3) : 1. 機会、好機、2. 状況、情勢、3. 関節。

(1)及び(2)と異なり「関節」を最後に持ってきている。

coyuntural ; (2)の説明「状況、状況に応じた、応急の」に「好機の、絶好の」を加えている。

(4) : 上記の(2)及び(3)の説明とほぼ同じ。

coyuntural ;「現在の、一時的な、経済情勢の、景気の」の訳語があり、medida coyuntural「景気対策」とある。

実務者の立場から言えば、(4)の訳語及び用例が最も適切であると思われる。

O. P.

(1) : (abr. de Ordo Praedicatorum (lat.)) 宣教者の修道会、ドミニコ会

(2) : ((略)) Orden de Predicadores 聖ドミニコ会

(3) : op.（略語）→opus とあり、上記(1)・(2)の説明はない。

(4) : OP〈略語〉←ordenador personal パソコン、PC とあり、上記(1)・(2)の説明はない。

ordenador

⑴：形容詞として「順序立てる、順序をととのえる」などの説明があり、名詞として「整理係、世話役、計算係」などがある。

⑵：形容詞「順序立った、きちんとした」、名詞「社長、所長、主任；コンピュータ」。さらに「～análógo アナログ・コンピュータ、～de húesped ホスト・コンピュータ、～personal パーソナル・コンピュータ」の説明に加えて用語集 COMPUTADOR の参照を指示している。

また、～de pagos 会計局員を示している。

⑶：形容詞としての説明はない。

名詞「コンピューター、ordenador personal パーソナル・コンピューター」に加えて、COMPUTADOR「コンピューター」（関連）の参照を指示している。

⑷：ordenador[1] と ordenador[2], ra に分けている。

ordenador[1]「コンピュータ；～de（sobre）mesa デスクトップコンピュータ、～personal パソコン」

ordenador[2], ra は、形容詞、名詞として「秩序づける；整理好きの［人］；命令する［人］」とある。

なお、技術関係のカタカナ表記では、語尾を長音にしないのが一般化されている。すなわち「コンピュータ」であって「コンピューター」ではない、その点、⑵・⑷の対応に比べて、⑶の研究社『新スペイン語辞典』は見劣りする。

ところで、新聞・雑誌の経済記事あるいは経済関連の文書で、insumo（多くの場合、複数形 insumos）という表現が出てくる。初学者にとってはわかりにくい経済用語であるが、この insumo 及び insumir について、各辞典の対応を下記に記す。

insumo；*insumir*

⑴：投資資本。capital invertido；insumir 投資する

⑵：投入量。insumir の見出し語はない。

(3)：insumo、insumir とも見出し語がない。

(4)：insumir「[資本・資源などを] 投入する」の項の派生語として、insumo「投入」がある。

さて、insumos と複数形で用いられている場合は、生産のために投入される「原材料」を指しており、原料（materia prima）よりもさらに広範囲にわたる材質を示している。ここにとりあげたいずれの辞典にも insumos の説明はない。

ところで、言葉として定着していれば、性に関する卑語も辞典に収録されるべきである。例えば、concha は本来、貝殻・甲羅などを意味するスペイン語であるが、中南米地域では女性の性器を意味する隠語として用いられている。(1)エンデルレ『西和辞典』にこの隠語的表現が説明されていないのは、聖職者関係の刊行物であるためと納得できる。

英語の come という動詞に、卑語として「オルガスムスに達する」の意があることは、現在では中辞典レベル以上の英和辞典に説明されている。これに相当するスペイン語に venirse という表現がある。上記の(1)『西和辞典』には、この卑俗的な表現はもちろんのことだが、venirse という再帰動詞についても一切説明がない。(3)研究社『新スペイン語辞典』では、～se（再）として「1. やって来る、来る；2.《ぶどう酒・パンの酵母などが》発酵する」の用例が挙げられているが、ここでとりあげている卑俗的表現については全く触れていない。一方、(2)小学館『西和中辞典』には、「3.（(卑)）オルガスムスに達する」が加えられている。さらに、(4)白水社『現代スペイン語辞典　改訂版』では、「3.《卑語》エクスタシーに達する、いく」とある。

ところで、昭和初期から現在に至るまで刊行された西和辞典を下記の2つのグループに分類することができる。

1．1927年から86年までに刊行された3点：
村岡玄、高橋正武及び V. ゴンサーレス・一色忠良のそれぞれによる『西和辞典』

2．1990年から99年までに刊行された3点：

小学館『西和中辞典』、研究社『新スペイン語辞典』、並びに白水社『現代スペイン語辞典』及びその改訂版

第１のグループは、それぞれの編纂者の個人的な努力によって完成している。第２のグループはそれぞれ10名近い執筆者グループによって編纂されている。我々日本人にとって、スペイン語は表記された文字をそのまま発音しても不都合がないため、第１のグループの西和辞典には発音記号は表記されていない。一方、第２のグループの辞典には、発音記号がつけられている。音声学的に正確を期すことを目的としているのだろうが、実際的な効果はどうなのだろうか。

８．和西辞典

前述の金澤一郎『和西辞典』（丸善　大正８年）から約20年が経過して、昭和12年（1937年）にファン・カルボ『日西大辞典』（三省堂）が出版されている。同書は、昭和15年（1940年）に「第二版」、同31年（1956年）に「第三版」が刊行されているが、いずれも初版のまま改訂増補されていない。

初版以降第３刷のいずれにも、「昭和十二年五月」の日付とともに、「財団法人比律賓協会」による序文が記されている。それによれば、「在マニラ『サント・トーマス』大学神学校ホアン・カルボ師ハ嘗テ我ガ国ニ在住スルコト二十七年ニ及ビ、其ノ間布教ノ傍ラ日西辞典ノ編纂ニ没頭シ、辛苦ノ結果約二十年ノ星霜ヲ経テ昨年ニ至リ漸ク其ノ稿成リ（後略）」とある。

さらに、同序文によれば、「比律賓トノ文化的友好増進ヲ目的トスル本協会援助ノ下ニ株式会社三省堂ヲシテ出版セシムルコトニ決シ、昨年十二月印刷ニ着手シ今回遂ニ其ノ発行ヲ見ルニ至レリ」とある。

そして、これに続く「自序」には、「本辞書ハ大日本帝国外務省文化事業部ノ総括的保護ト援助ノ下ニ、比律賓協会ガソノ出版ヲ御引受下サッタモノデアリマス」と記されている。

米西戦争（1898年）の結果、当時のフィリピンはアメリカ合衆国の統治下にあったが、かつての宗主国スペインの影響は濃厚であった。さらにまた、昭和12年当時の我が国にあっては、フィリピンを含めた南方圏への進出気運が高まっており、比律賓協会の協力によって『日西大辞典』が出版されたのも、時代の流れを示している。

13×18cm、全1427ページのこの『日西大辞典』も、初版発行の昭和12年当時にあっては、「大辞典」と称しても誇大表示にはならなかっただろう。同書序文の記述から逆算すると、明治39年（1906年）頃から昭和11年（1936年）頃までの約20年間にわたって和西辞典の編纂作業が続けられたことになるが、ファン・カルボ師の努力は称賛されるべきである。しかしながら、『日西大辞典』の第3刷が出版された昭和31年（1956年）当時にあっては、既に時代遅れの存在となっていた。

また、この『日西大辞典』は、日本語に接しようとするスペイン語圏の学習者も対象にしている。ローマ字表記の見出しに続いて、カッコ内に日本語が記載されており、これに対応するスペイン語の語彙あるいは説明が続いている。例えば、Mikuji（御籤）とあり、「凶運を知り、注意するため、祈りあるいは運命について神々に尋ねるに役立つ占い棒（varilla）」といった内容のスペイン語の説明が続いている。ぜいちく（筮竹）と混同しているのではないかと思われる説明である。「おみくじ」の機能を最も簡潔に表現するスペイン語として oráculo escrito などが近いと思われるが、この和西辞典には記載されていない。

『日西大辞典』第 3 刷発行から 6 年後の昭和37年（1962年）に、田井佳太郎『和西小辞典』（大学書林）が刊行されている。そして昭和39年（1964年）に、永田寛定監修・田井佳太郎編『和西大辞典』が同じく大学書林から出版された。見出し語数 4 万5,000語、派生語、慣用句、例文などを加えると総語数10万語に及ぶと、同書に記されている。その後の経過を辿ってみると、昭和49年（1974年）第 6 版、平成 5 年（1993年）第10版であるが、この時の価格は 1 万 300 円である。

この『和西大辞典』巻頭の「監修者のことば」に、編纂者田井佳太郎の

経歴が以下のように記されている。東京外国語学校（現在の東京外国語大学）スペイン語学科を終了した田井は、明治42年頃ペルーに渡っている。ペルー及びボリビアで開拓事業に従事し、リマにおいて外国企業に勤務したようである。太平洋戦争時における米国での収容所生活ののち、捕虜交換船で35年ぶりに帰国した。

戦後の苦境のなかで、スペイン語文法書を書きあげたのち、「和西辞典の編集に手をつけた」と記されている。そして、「80頁の大学ノート59冊にぎっしり書きこんだ」原稿をまとめたのは、「昭和30年の頃だった」とある。

「田井君は出版社を求めて足を棒にしていた。その疲れきった姿には、見る目を蔽わしめるものがあった」と永田寛定は記しているが、その頃の田井佳太郎は70歳になろうとしていた。昭和32年１月に大学書林との間に出版契約が結ばれ、「それ以来、田井君は生活が安定して」とある。「科学技術の用語」なども取り入れるため、４年間にわたってさらに作業が続けられたが、「田井君の健康が傾きだした」ことなどから、まずは『和西小辞典』を出版することとなった。

しかしながら、『和西小辞典』の出版すら、昭和37年３月14日に死去した「田井君の臨終にまにあわず」と、監修者は痛恨の思いを記している。76歳の田井佳太郎がこの世を去ってから２年後に『和西大辞典』は刊行されている。さらに、1968年には同じ大学書林から田井佳太郎『和西中辞典』が出版されている。『和西大辞典』の縮刷版といった内容である。

1979年３月、宮城昇、エンリケ・コントレラス監修『和西辞典』が白水社から出版されている。コンサイス版1240ページのこの辞典の見出し語は３万2,500語と記されているが、大学書林『和西大辞典』よりも質的に充実している。なお、同じ79年、宮本博司編『現代和西辞典』が大学書林から出版されている。

『和西大辞典』は、昭和20年代に、田井佳太郎によって編纂されたため、科学技術分野を含めた時事用語の対応に見劣りする。例えば、「コンピュータ」の項はこの『和西大辞典』にとりあげられていないが、白水社『和西

辞典』には見開き2ページ近くにわたってコンピュータ関連の日本語と、それに対応するスペイン語が収録されている。また、「集積回路」の見出しは、当然ながら『和西大辞典』には見当たらないが、白水社『和西辞典』は circuito acumulador としている。正しくは、circuito integrado とすべきである。

一方、『和西大辞典』には、「偕老同穴」「真摯」など古風な表現が取り入れられているが、白水社『和西辞典』には見当たらない。いずれにせよ、出版後20年を経過した白水社『和西辞典』も、2000年12月に改訂版が発行される。

9．西和小辞典及び専門用語辞典

（1） 西和小辞典

大学の第二外国語履修者を中心に初級段階で終了するスペイン語学習者が多いことから、西和小辞典が比較的数多く出版されている。

まず、昭和16年（1941年）の太田兼四郎『西班牙語辞典』が、昭和32年（1957年）に同じ岡崎屋書店から『スペイン語辞典』として出版された。

太田兼四郎は、東京外国語学校スペイン語専修科（夜間課程）を中退し、大正末期にアルゼンチンに渡っている。現地で邦字新聞の編集に従事していたが、昭和6年に帰国した。日本海外植民学校でスペイン語を教えていたが、のちに横浜にあったチリ共和国領事館にも勤務した。この間、10年にわたって上記の『西班牙語辞典』の作成に従事したが、南米在留邦人によって利用されることを念頭においていたと言われる（『東京外語スペイン語部八十年史別巻――人物と業績』、1982年、248-249ページ）。

その後、1960年以降97年2月に至るまでに、いわゆる「小辞典」として下記が刊行されている。

1960年　渡辺通訓『小西和辞典』大学書林

1961年　高橋正武『西和小辞典』白水社

1961年　渡辺通訓『スペイン語小辞典』大学書林

1992年　宮城昇、宮本博司編『スペイン語ミニ辞典』白水社

1994年　鼓直ほか編『プログレッシブスペイン語辞典』小学館

1997年　宮本博司編『パスポート初級スペイン語辞典』白水社

2000年　鼓直ほか編『プログレッシブスペイン語辞典　第二版』小学館

上記のうち、『パスポート初級スペイン語辞典』と『プログレッシブスペイン語辞典　第二版』が、新しいアルファベット配列を採用している。

「小辞典」の利用者の多くが、大学の第二外国語課程でスペイン語を履修する学生達である。1990年代初めの我が国の大学でスペイン語を履修する学生数は、合計3万人程度とする試算がある。大学における第二外国語の履修が、強制されなくなっているのが現在の状況である。前記の小辞典の多くが絶版となる一方で、新しいアルファベット配列に従った改版あるいは新版が、これから時間をかけて出版されてゆくことになるだろう。

（2）　専門用語辞典

特定分野の専門用語を集めた辞典は、スペイン語に関しても既に戦前期に出版されている。昭和17年（1942年）の村岡玄・村岡恭子編『中南米地名辞典』、同19年（1944年）大矢全節編『西日医学大辞典』などがあることは、既に第5章で触れている。

戦後になって、昭和25年（1950年）に、小出寿夫編『和西・西和貿易商品語集』（貿易実務研究会・大阪）が出版されている。そして昭和36年（1961年）には、約3万語を収録した、大阪商工会議所編『和西商品名辞典』（白水社）が出版された。中南米地域向輸出カタログの作成あるいは商品名のスペイン語表記が要求される船積書類の作成など、実務上の必要性に対応するためである。

また、スペイン語圏との交流が多い業種では、業務上の必要性から用語集が編纂されることがある。日本水産株式会社海上勤労グループ編『和西・西和漁業用語集（スペイン語）』（成文堂書店　平成3年）は、全318ページであるが、3,000円とかなり高価である。

1980年代及び90年代の20年間で、下記の3点のスペイン語技術用語辞典及び用語集が刊行されている。

⑴相沢正雄『土木技術者のためのスペイン語辞典』山海堂、1983年、412ページ、8,000円

⑵小谷卓也・郡亜都彦編『日英西技術用語辞典』研究社、1990年、1270ページ、6,400円

⑶国際建設用語研究会編『スペイン語建築土木実務用語集』彰国社、1993年、622ページ、9,670円

⑴の山海堂は、昭和20年代には大学受験参考書を出版していたが、現在では土木・建築関係の出版で知られている。編纂者は、フジタ工業（のちにフジタ）渉外部に勤務していた土木技術者である。水理学、土質力学など9項目に分けて技術用語を収録しているが、見出し語の語頭すべて大文字となっているのは、奇異に感じられる。

⑵の第3部（西―日―英）は、414ページのなかに2万5,000語を収録している。

⑶は、株式会社フジタの技術関係者によって作成されているが、日本語・スペイン語を合わせた総収録語数は約3万語である。中南米地域における「建設プロジェクトに従事してきた（株式会社フジタの）社員が日々の業務から身につけた実務用語を基本データとした」と同書の「まえがき」に記されている。この用語集の出版に際して、フジタが経済的な援助を提供したと思われるが、その後の建設業界の低迷を考えると、時期的にぎりぎりの出版であった。

参考までに価格を記しているが、英和技術用語辞典に比べると高価になっているのは、出版部数が限られているためである。今後は、スペイン語に対応した新たな技術用語辞典の刊行は期待し得ないと思われる。

10. ポルトガル語辞典

1603年に刊行された『日葡辞書』は、我が国最初の日本語・ヨーロッパ

語辞典である。こうした輝かしい歴史にかかわらず、その後現在に至るまで、我が国におけるポルトガル語辞典の刊行は、スペイン語辞典よりもさらに低い水準にとどまっている。

第3章の葡和辞典の項で述べたように、大武和三郎のひたむきな努力によって、大正期において『葡和辞典』及び『和葡辞典』が、いずれも自費出版に近い形で刊行されている。なお、同書の緒言には、「大正13年既に稿を起した」とあるが、1937年の完成までに14年間を要したことになる。

以下にとりあげる野田良治もまた、個人の努力によって『日葡辞典』を刊行している。野田は東京専門学校（早稲田大学の前身）を卒業後、明治30年（1897年）書記官として外務省に入省した。外務省時代の野田良治は、フィリピン、メキシコ、ペルー、チリ、ブラジルなど、スペイン語及びポルトガル語圏に在勤したが、昭和10年（1935年）に退官した。その間、『世界三大宝庫南米ブラジル人国記』（博文館、昭和6年）、『大アマゾニア』（万里閣）、『らてん・あめりか叢説』（十一組出版社、昭和17年）などの著述がある。

戦後になって、独力で編纂した『日葡辞典Ⅰ』（622ページ）及び『日葡辞典Ⅱ』（1192ページ）が、それぞれ昭和38年と41年に有斐閣から出版されている。同書の『あとがき』に、「編纂着手後完結に至るまでの満十六年（1949−1965）」と記されているが、著者74歳のときに着手されたことになる。野田良治は、昭和43年（1968年）に93歳の長寿を全うしている。

一方、戦後に発行されていた葡和辞典としては、友田金三『ブラジル語小辞典』などがあるが、昭和45年（1970年）に浜口乃二雄・佐野泰彦『ポルトガル語小辞典』（大学書林）が発行された。見出し語2万5,000のこの辞典は、コンサイス判よりやや小さく、全663ページである。巻末に和葡辞典が付いているが、葡和、和葡ともに、実務上の使用には充分な内容でない。筆者が所有するこの辞典の奥付には昭和50年（1975年）第21版発行とあり、版を重ねているのは、他に然るべき葡和辞典が存在しなかったためである。

1990年6月に施行された入国管理法改正以後、日系ブラジル人の来日及

び定住が急激に増加したが、この傾向とともにローマ字表記を併用した簡便なポ・日辞典あるいは日・ポ辞典が刊行されているが、葡和辞典というよりも語彙集に近い内容である。

そのなかに、星誠編『復刻最新和葡辞典』（南雲堂フェニックス、1997年）及び同『復刻最新葡和辞典』（同、1998年）がある。星誠は戦前の東京外国語学校時代から東京外国語大学教授の職にあり、『ポルトガル語四週間』の著者として知られている。旧版はいずれも日伯文化協会から刊行されている。1945年に発行された『最新葡和辞典』は、3万5,000語収録の456ページである。旧版が1960年に出版された『最新和葡辞典』は袖珍判1184ページである。旧版の出版以来それぞれ37年あるいは45年が経過しているが、全く増補改訂しないまま、手早く「復刻」版を刊行している。しかも、『復刻最新和葡辞典』は8,500円という価格である。

1996年になって、池上岑夫ほか編『現代ポルトガル語辞典』が白水社から刊行された。約5万3,000語を収録したこの辞典は、これまでに刊行された葡和辞典のなかでは最も充実している。とはいえ、スペイン語を含めて、他の現代ヨーロッパ語・日本語辞典に比べると、質量ともにかなり見劣りするのは、いたしかたない。

さらに、1998年1月、ジャイメ・コエーリョ、飛田良文編『現代日葡辞典』が小学館から刊行されている。同書の広告文には、「現代語を中心に4万7千語収録。最新・最大の本格的ポルトガル語辞典」とある。縦横約19×25.5cm、1461ページの大判であり、見たところ研究社『新和英大辞典』に匹敵するサイズであるが、本体価格2万4,000円となっている。

終わりに

昭和2年（1927年）に刊行された村岡玄『西和辞典』は、その後の30年間にわたって我が国唯一の西和辞典であった。昭和33年（1958年）に初版が出版された高橋正武『西和辞典』は、村岡『西和辞典』に比べると遥かに優れた内容であるが、今日においては、いささか「古風な」辞典である。

しかしながら、どちらも長い年月をかけてほとんど独力で編纂された西和辞典であることを考えると、先人の努力に敬服せざるを得ない。

ところで、昭和12年（1937年）に『葡和辞典』を独力で完成した大武和三郎は66歳を迎えていた。また、野田良治が『日葡辞典』全２巻の編纂に着手した昭和24年（1949年）には既に74歳に達しており、16年後に完成した時は90歳の長寿を迎えていた。

そして、田井佳太郎が『和西大辞典』の原稿を一応完成させた昭和30年当時、もはや70歳に近い年齢にあった。その『和西大辞典』は昭和39年（1964年）に刊行されたが、田井佳太郎が76歳でこの世を去ってから、２年を経過していた。

いずれも戦中、戦後の困難な状況下にあって、さらには人生の後半期にあった先人達が、辞典編纂にかけた真摯な努力を思うとき、私達は心からの敬服の念にひたるのみである。

（参考文献）

児玉悦子「我が国におけるスペイン語教育の歴史と現在」『桜美林エコノミックス』第32号（1994年12月）。
児玉悦子「西和辞典の過去と現在」国士舘大学『教養論集』第47号（1999年３月）。
中川清「明治期におけるスペイン語及びスペイン文学への関心Ⅰ、Ⅱ」国士舘大学『教養論集』第35号、第36号（1992年１月、1993年３月）。
中川清「日本・ラテンアメリカ交流史Ⅰ、Ⅱ」白鴎大学『白鴎法学』第４号、第５号（1995年10月、1996年１月）。
竹林滋ほか『世界の辞書』（研究社、1992年）。
坂東省次『スペイン研究日本語文献目録1880−1992』（京都外国語大学、1993年）。
白水社『白水社80年の歩み――出版物総目録』（1995年）。